

蝶の博物詩

生態25

求愛2



ヒメジャノメ(左：雄, 右：雌)
(2000年8月20日 長野, 野尻)

photo by

Nishiyama



ミドリヒョウモン(左：雌, 右：雄)
(2003年8月1日 長野, 野尻)

蝶の博物詩

生態25

求愛2

第二次世界大戦が勃発し、赫々たる戦果に国中が沸き立っていたころ、私は(というより親は)中学受験の準備に悩んでいた。当時、都立の中学校は学区制によって、杉並区に住居のある者は、2中(現在の立川高校)、4中(現在の戸山高校)、6中(現在の新宿高校)、および10中(現在の西高校)に、おそらくは成績によって、割り振られた。私は都立中学を受験できず、通学に片道1時間もかかるある私立の七年制高等学校尋常科を受けることとなった。

その際の入試問題の1つに“あしの奇数の動物を挙げよ”という、当時としてはいささか風変わりな設問があった(答えは後述)。

ほとんど偶然に合格、入学できたあと、昆虫少年であった私は生物の和田八重造先生に私淑し、将来の運命が決まった。先生はあまり知られていないが、『原色日本鉱物図譜』(1936年)の著者であり、『自然科学入門』(1923年)では観察、理解、計算の総合力の必要性を実物で示された優れた教育者であった。1年生の夏、たった半日であったが、軽井沢の離山に登って、和田先生から聞いた昆虫や植物のこぼれ話は忘れられない。

蝶の話に戻る。蝶の配偶行動、つまり交尾に至る求愛行動は種類によってさまざまである。それぞれの特徴的な挙動を野外で観察するのは、だからこそ実に楽しい。ときの経つのを忘れ、カメラを向けるのを忘れるほどである。

2頭の白いモンシロチョウが、先になり、後になってヒラヒラと飛ぶのはよくみかける光景である。これに対して野性味のある雄のスジグロシロチョウはとまっている雌の上方を長い間飛びながら誘惑している。ハギの上でのつがいのキチョウの舞はとまることなく数時間続く。モンキアゲハやナガサキアゲハのような黒い大型のアゲハの雄は猛スピードで空高く雌を追う。写真のヒメジャノメやウラジャノメは仲良く向き合い、雄はおじぎをしながら雌に近づく。ヒメシロチョウは食草のフジバカマの繁みの中で、触覚を触れ合って愛を確かめている。ミドリヒョウモン(図)はわざとゆっくり飛ぶ雌を追いかける運動をしばらく続けたあと、葉上にとまって後ろから近づく。まんざらでもない雌はお尻を上げ、まもなく交尾に至る。

求愛の時間はこのようにさまざまであるが、蛹から羽化し、翅の十分に伸びきらない雌蝶を強引につかまえて交尾する、元気旺盛な蝶もいる。

さて前述の“あしの奇数の動物”の私の解答はカタツムリ、タニシ、カワニナや貝殻のないナメクジである。水生動物を加えるならば巻貝類もそうであろう。

“ナランダ、俺なんか三本足のカエルをみたぞ”と友人が馬鹿にしたようにいった。確かにカエルの肢の干方は必ずしも左右同時ではないので、三本足の時期があってもよい。尾もまだ若干残っているはずである。

西山茂夫